

死にそうになつた秋フリーラン

栗原和明

これは二年生「黄金の七人」マイナス（鈴木
プラス富田）による秋フリーラン初日の栗原も
についての記録である。

十一月二日 我々は夜行「アルプス」号に
乗りこんだ。みんなでランプをやつていまか
奥谷と名取が「これをしらないと一年にバカに
されるぞ」といって、十人乗車をやり始め
た。私と全谷と沢木は、ひっそりなつて、その
タネをあらかじめがまんばつた。（私は今もその
タネがかわらないうち）みんなでワイワイさわ
わいでいると、私のとなりになつて、てい大登山者
らしき人に「しずかにせい！」としかられ

全乗車。そして、この登山者らしき人は
私に「松本の手前でおこしてくれ」といって、
満員そうじ目を閉じた。しかし私もフロントバ
ックを枕に寝てしまひ、松本の手前で反対に
沢木におこされたのだ。ハッと思ひ、となりの
人をおこそうとふり向くと、その人はもうおき
ていた。夜行で寝たのは私だけだつた。それな
りになせぬのよな事だ。

松本で乗りかえ新島々に到着。自販車を組み
たて、朝食をとろうと駅の食堂にかつてに入り
こみ、かつてにお茶を飲んでいると、店のおじ
さんがまた準備できてないので、立喰いそばに
してくれと言われ、しかたなく天ぷらそば一ぱ
い、朝食をすませた。これが私をあのような恐
しい事能におちいらせた第一歩であつた。

昼食は上高地の食堂で親子どんぶりを食べた。
 のだ。観光地の食堂ではどこでもそうであるが
 コンブも、その量は、ほんとも少ないのだ。ふ
 たんの私は、きゅめて少食(一日平均一・七食
)なので、昼食はこれですました。ほかの連中
 は、これだけでは足りずにパンを買い食べとい
 た。ここで私は大きなあやまちを犯してしまっ
 た。それはサイリリングというものは、非常に
 体力を消耗するということ。これから先は、ハ
 ードであること、大空のなりの辺ぴなハードな場
 所に行くときは、必ず非常食をそつ。これらの
 ことを忘れていたのである。

午後は、下回のような任意的なハードコース
 AB間からはげしい空腹におそわれ、CD間で
 は体全体にかかはいらすハントルすら満足にも

てない状態で、アキビが効発するようになり、
 EF間では、十歩歩くごとに一休み。
 F点でついにダウン。路上で下覚
 にも寝てしまった。約一時間後
 目がさめ、再び空腹をかかえ白
 転車をひきす、ていとG点に
 なんと温泉旅館があるのです。
 助かったと思ひ、そこでせんべい
 を買い、空っぽの胃の内に投げこ
 んだのです。その後はひますらH
 点にたどり、マ蕨の間中ペダルをこ
 いたのです。

ユースでヘルパーに「もう一か月も時期がお
 そか、たら、路上で寝たりすると寒さで本当に
 死ぬところだったよ」と言われた。

